▼釈迦殿の落慶式のおこなわれたのが五七年一〇月四日、爾来まる三年、本尊釈迦牟尼仏は須弥壇上にただ独りでおられました。さびしかったことでしょう。人間でいえば単身赴任ですから。脇仏がようやく開眼のはこびとなり、本尊様もさぞおよろこびのことでしょう。人間でいえば本尊様は御主人、脇仏は奥様です。奥様の内助の功によって御主人の力は倍増するのです。釈迦殿の本尊様いよいよ御威光を発揮することでしょう。

▼文殊・普賢両菩薩は『不動経』の主役で、不動明王を紹介し、その徳を讃え、御利益について述べておられます。この両菩薩を釈迦殿の脇仏に迎えられたことは、釈迦殿と不動殿が目に見えない建物で堅く結ばれたことになり、善光寺の今後一層の発展が約束されたようなもので、めでたい限りです。(佐藤老師の法話より)

▼「宗教新聞」から、新年の抱負につき原稿を求められた山主は、「海の彼方に夢を」と題して、次の一文を送られました。

『一昨年、海外留学僧派遣育英会を設立し、昨年二名の留学僧をタイ国ワット・パクナムに送り、今年はアメリカの禅センターに派遣すべく目下募集中です。世界的視野のもとに—というのは私が学生時代からの念願で、タイ、アメリカで修行したのもそのためであり、その体験を通して有為の人材に海外留学の機会を与える事になりました。

そう決意し、伽藍整備が一段落したので直ちに着手した次第です。去る十月バンコクに行き二人の留学僧の修行の姿をまのあたりにみて、この大業に手がけた法幸を感じました。今年はアメリカ派遣、去年とはまた違った緊張が湧きます。有為な人材を送り、秋に現地で彼らに相まみえるであろうことを思い、今から海の彼方に夢を馳せてます。』

▼二月三日午前十一時より定例の節分会がございます。福升の用意もありますので、お揃いでお出掛け下さい。

(小熊)

成寿　第四号
昭和六十一年一月十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

流水かんのん

失意にあえぎ
すべての光を失い
生きる力をすりへらして
さまよいつづけた果て
はるかにあなたを見て
胸をうたれたのです
私と同じ憂いの眼
私と同じ悲しげな笑み
ひきよせられて仰ぎ見る
〝ただじっと耐えよう
いまは……
すべては流れ去るものを〟
耳もとでささやいたあなた
ああ、あなたこそ
大悲観音　わが胸底に坐し給う

遠藤太禅「観世音声を限りに」より

春光滿
横浜